

タイトル	戦国期山科本願寺寺内町と在地寺院との関係について - 西宗寺と興正寺を中心に -
著者	孔, 継金; KOU, Keikin
引用	年報新入文学(19): 82-106
発行日	2022-12-25

# 戦国期山科本願寺寺内町と在地寺院との 関係について

—西宗寺と興正寺を中心に—

孔 継 金

一、はじめに

寺内町（二）の研究は歴史、地理、経済、社会といった視点から分析されることが多いが、宗教的な面からの議論はそれほど見られない。寺内町の宗教的性格について、西川幸治氏は「人々の救済を正機とする真宗の信仰を共有し、あらゆる社会的属性を超えて、平等に阿弥陀の本願に帰し、たがいに同朋・

同行とよびかわし、人間的に結びつこうとする宗教的連帯感によって構成された都市で、その精神的共同体を確保し、その生活共同体を維持することを意図して計画的に構築された環濠城塞都市である<sup>(三〇)</sup>。」と述べている。

一方、仁木宏氏は、西川幸治氏の典拠は黒田俊雄氏の「仏法領」の理論にありと示し、本願寺側が持つ精神、信仰の側面と寺内町が現実世界に持つ権能の側面とのバランスを重視しながら、相互の関係性を追求する点が重要であると指摘した<sup>(三一)</sup>。さらに、信仰の面から見ても仁木宏氏は遠藤一氏（『戦国期真宗の歴史像』永田文昌堂、一九九一）の観点を援引し、富田林や枚方にある寺内町の研究を列挙し、寺内町に他宗徒の活動があることから、「寺内町の志向を一向宗のみを基準に説明したり、一向宗寺院の宗教的支配の側面のみを一面的に強調したりするとは誤りである」との議論も見られる<sup>(三二)</sup>。

寺内町の宗教状況について、鍛代敏雄氏は摂津中島本願寺寺内町について考察し、寺内町は「町人の中に他宗徒が含まれていた」と指摘する<sup>(三三)</sup>。寺内町の住民の信仰は多様であり、真宗に改宗した寺院も本願寺と異なる側面を有していた。元来、浄土真宗は阿弥陀仏に対する一向専修を宗旨としているため、改宗した寺院はこういった宗旨を受け入れ、以前の宗派色を一掃するのが一般的であるように見える。しかし、実際は、寺院中の一部の施設に改宗以前の遺風を残し、施設や行事にも以前の宗派の色彩を色濃く残している寺内町もあつた<sup>(三四)</sup>。

そこで、本稿では本願寺派により造られた寺内町は時代順に吉崎御坊、山科本願寺、石山本願寺等のうち、比較的早い時期に建立された山科本願寺寺内町を研究対象に、町内にある寺院の関係、宗教状況等を考察していくこととする。

当面の検討課題として、寺内町にある西宗寺と山科本願寺との関係、また「野村本願寺古屋敷之図」に「仏光寺帰尊地」と記録されている仏光寺（のちの興正寺）と山科本願寺との関係について、その具體的なつながりを整理する。さらに山科本願寺に参入した寺院に対して、蓮如はどのような態度をとっていたのか、同朋同行思想の観点から検討したい。

## 二、山科本願寺と西宗寺

本稿は山科本願寺寺内町にある寺院と本願寺の関係を検討するものである。しかし、管見の限り、寺内町の中に西宗寺があることを明確に示す史料はみあたらない。そこで、考古発掘の調査結果から山科本願寺寺内町と西宗寺との位置関係を明確にした上で、山科本願寺寺内町と西宗寺と関連する史料を検討していくこととする。

西宗寺は山科本願寺と同じ「雍州山科本野村 西中路<sup>(七)</sup>」に位置しているという。「西中路」とは、現在の京都山科区西野<sup>(八)</sup> 広見町付近と考えられる。山科本願寺の発掘調査では現在の西野広見町で山科本願寺時代の焼土を含む遺構や遺物も確認されていることから、この場所は寺内の一部であったとされる<sup>(九)</sup>。こうしたことから、西宗寺は山科本願寺寺内町の中にある寺院であることが確認できる<sup>(一〇)</sup>。

西宗寺と本願寺との関わりは本願寺が山科の地に進出する時から始まる。本願寺の山科進出にあたって、山科の郷民は本願寺の発展を支えたという。その一人が野村の有力郷民海老名氏である。海老名氏

は野村の「四五丁余」の土地を本願寺に寄進し、本願寺の末寺である西宗寺を開基したと言われている<sup>(二二)</sup>。  
『大谷本願寺通紀』によれば、「十年正月、至山科野村村分東西折寺地、土人海老名氏、施所持地<sup>(二三)</sup>」  
と山科郷民である海老名氏が寺地を寄進したと言う。海老名氏は「尊氏將軍ノ幕下、遠州ノ刺史海老名  
遠江守カ子孫、海老名五郎左衛門尉トイヘルモノアリケルカ」とも推測され、寄進した土地は「蓮申上  
ケレハ幸ヒ某シ所持ノ針木ノ林四五丁余リノ平地アリ。願ク此地ニ御堂建立アレカシ、寄附シ奉ント望  
ミケレハ<sup>(二四)</sup>」と「針木ノ林四五丁」あまりだったという。

上記の史料から、海老名氏は山科郷の有力郷民であり、蓮如が山科に進出するにあたって、野村の地  
を蓮如に寄進し、山科本願寺寺内町の建立に力を捧げたことが確認できる。

明治期に興正寺派谷下一夢氏が記した『真宗法脈史』によれば、海老名五郎左衛門は「本寺有力の門  
徒にして、後僧となりて一寺を建て、本寺譜代の末寺として永く臣事せし者、即ち山科西宗寺の初代な  
り<sup>(二五)</sup>」とあり、海老名五郎左衛門は興正寺の門徒であると述べられている。

興正寺は仏光寺経豪が本願寺に参入後、山科本願寺寺内町において建立した寺院である<sup>(二六)</sup>。興正寺  
と山科本願寺の位置関係は、光照寺本「野村本願寺古屋敷之図」によって知ることができる。古図によ  
れば、「御本坊」に隣接する南側の地に「佛光寺帰尊地 四十二坊トモニ」とある場所が興正寺の所在地  
とされる。

『真宗法脈史』によれば、海老名五郎左衛門は興正寺の門徒であり、海老名氏を任職とした西宗寺も  
興正寺の末寺であるという。西宗寺を興正寺の末寺とする記述は『本願寺史』にも見られる<sup>(二七)</sup>。それ  
ならば、海老名五郎左衛門はいつ西宗寺を開いたのか、また海老名氏と本願寺、興正寺とのつながりは

どうであったのかという疑問が湧いてくる。

蓮如は多くの名号や、絵像、絵伝を各地の門徒に下附したことが知られる。下附する際に蓮如が、署名、年月、願主の住所と名前を裏書きして与えることによって、坊主、門徒として本末関係が成立、あるいは再確認できるという<sup>(二七)</sup>。

ここで、文明十三年（一四八一）十月十八日に蓮如が願主積浄乗（海老名五郎左衛門）に下附した方便身像の裏書を提示したい。その裏書には、

方便法身尊形 雍州山科本野村 西中路

文明十三年十月十八日 釈蓮如花押 願主 積浄乗<sup>(二八)</sup>

と書かれている。注目されるのが、願主が所属する「西宗寺」の名が提示されていないことである。

先述のとおり、蓮如が下附した名号、絵像などの裏書には、願主の名前、年月、住所あるいは安置する場所などが記されるのが一般的である。しかし、上記の方便法身像の裏書には、願主の住所「西中路」だけを記録し、西宗寺の名を示していないのである。それゆえ、方便法身像を下附された文明十三年十月十八日（一四八一）の時点では西宗寺はまだ開かれていなかったと推測できる。また、少なくともその時点で海老名氏はすでに本願寺門徒と見做されていたと思われる。

続いて、海老名五郎左衛門と興正寺の関係について検討する。『真宗法脈史』によれば、海老名五郎左衛門は興正寺門徒とされる。その主張を裏付ける史料として、『紫雲殿由縁記』<sup>(二九)</sup>に

海老名五良左衛門子 今云西宗寺

下間後玄英剃髮シ、助縁ト云、家頼眉目をヒラキケル、文明十五年、澁谷佛光寺経豪、  
本願寺ニ帰服ス、経豪ニ随附シ、同時ニ山科ニ帰服ス

と、海老名五郎左衛門の子は経豪に随附して本願寺に参入したという。この史料から海老名氏と仏光寺経豪と関わりあることが推測できるが、経豪の本願寺への参入時期について、議論する余地が残されている。

経豪の参入時期は『紫雲殿由縁記』に文明十五年とされるほか、『大谷本願寺通紀』「歴代宗主伝第二」に

(文明十四年) 是年渋谷仏光寺経豪、以出口順如為介、帰属門下、末寺六坊等従之 (一〇)

『大谷本願寺通紀』「旁門略伝標目」に

今在本山境内、非別派別山也、然以為御門跡家故、準余門而列之。首祖蓮教、初名経豪、  
仮号大納言公、仏光寺第十四世主、為経誉肉兄、文明十三年、帰属本山 (後略) (一一)

とされる史料も見られる。

また、『仏光寺派古文章』に収められる『延暦寺大講堂衆議状案』に

文明十三年十一月三日、山門大講堂集會儀 所詮退彼仏光寺之住持

文明十四年八月日 右、渋谷仏光寺事、当住花恩院大納言、無碍光衆本願寺依随逐、

被放御被官、以正法興行仁躰補任云々 (二二)

との記録がある。『延暦寺大講堂衆議状案』は比叡山から仏光寺派に与えられた書状である。それによると、文明十三年十一月三日に比叡山は経豪を仏光寺住職の座から退ける指示を下し、翌年の文明十四年に経豪が無碍光衆本願寺に随逐したことによって追放されたことが知られる。

以上の史料から経豪の本願寺への参入時期には、文明十三年、文明十四年、文明十五年の三つがあることがわかる。『延暦寺大講堂衆議状案』に言及された経豪が住職の座から離れた時期と、仏光寺から追放された時期から考えれば、経豪は文明十四年に本願寺に参入した可能性が高いと考える。

一方、海老名五郎左衛門は文明十三年八月にすでに蓮如から方便法身像を下附され、本願寺の門徒となっていたことから、彼は経豪が本願寺参入する前に、仏光寺派や、本願寺派に属していたことが推測できる。したがって、経豪が山科に興正寺を建ててから、海老名氏は再び興正寺門徒となったと考えられる。

ここまでの分析から、海老名氏は浄土真宗の各派閥を転々と所属していた、あるいは本願寺の各派閥に兼ねて属していた可能性が考えられる。



おそらく海老名五郎左衛門の事例からして、蓮如期において、門徒は本願寺派に限らず、所属する派閥を比較的容易に変えることができたのだろう。また、蓮如時期の本願寺教団には真宗他派の門徒が混在し、錯綜していた状況があったと推測できるのである。

### 三、山科本願寺と興正寺

ここからは、本願寺と興正寺の関係をめぐる問題を検討していく。

先に述べた通り、興正寺は本願寺の「御本坊」と隣接する南側の地で再興された。ここで、「再興」という言葉を使用するのは、仏光寺の開基である了源が十四世紀初頭に山科の地に興正寺を開いたことがあるからである。仏光寺了源が興正寺を開基した経緯は、元禄年間に作られたと言われる<sup>(三三)</sup>『院家系図記』に次のように記述されている。

興正寺者 覚如上人之弟子空性房了源之開基也 祖師聖人直弟真仏ヨリ 源海 了海 誓海 光  
明ト付法シテ光明ノ門徒ニ弥三郎ト号スルモノアリ 是ハ平維貞ノ家人比留左衛門太郎維広カ家来  
ナリ 維貞京六波羅ヘ 上洛ノ時 弥三郎モ上洛シケルカ 本願寺第三世覚如上人ヘ参詣シ 則大  
谷ニテ剃髪付法シテ空性房了源ト号ス 元応二年比ト云々 其後正中元年八月山科ニ一寺ヲ建立ス  
覚如上人ヨリ興正寺ト号ヲ賜フ後ニ法義ニツキ自義曲解の誤リアルユヘニ覚如上人ヨリ門徒ヲ攢撥

上記史料によると了源は入道する以前の名前は弥三郎であった。平維貞の家人比留左衛門太郎維広の家来として元応二年（一二三〇）平維貞と共に上洛し、大谷本願寺覚如を訪問。そこで出家し了源と号した。正中元年（一二三四）八月に山科に一寺を建て、覚如上人より興正寺と命名された。後に了源は法義を曲解したことで、覚如上人から破門され、嘉曆三（元徳二年）（一二三〇）に寺を渋谷に移して寺号を仏光寺と改めたという。

この史料から了源は覚如の元で学んだことがあり、仏光寺はもともと本願寺と繋りがあつたことがわかる。こうした記述は『本願寺末脇門跡興正寺開基以来諸留書』（二五）にも見られる。

了源は覚如の令を受け存覚に指導され（二六）、数十帖の聖教を与えたという。したがって、了源の教義に対する理解は存覚の影響を受けていたのではないかと推測できる。

元亨二年（一二三二）六月に覚如は存覚と義絶したが、その時、了源は存覚のために住坊を建てたことがある。一方、存覚は了源建立の寺に「仏光寺」という寺号を付与していたことが知られる。存覚と了源との関係は、了源が覚如に破門された後でも継続していたとみられる（二七）。

了源が存覚に破門されたのは、教義上の主張が異なっていたためというが、それは了源に教義上の影響を与えた存覚と関わりがあるのではないかと考える（二八）。後に、了源が考案した「名帳」「絵系図」による布教で仏光寺の寺勢は隆盛發展の途を辿り、本願寺を凌ぐ勢力に發展していった。その間、覚如上人が『改邪鈔』において仏光寺を批判したことも知られる（二九）。

こうして、その後の仏光寺第十四世経豪の本願寺参入に至るまで、仏光寺と本願寺との関係は「親鸞の本廟である本願寺とそこへ参詣する親鸞末弟と言う関係に過ぎない<sup>(三〇)</sup>」といわれるようになったのである。教義の相違で、分離された仏光寺と本願寺派はそれぞれ異なる方向に各自の発展を遂げていくことになる。史料に見える本願寺派と仏光寺派との関係は複雑で、競争や対立が激しい時期も見られるのである。

そうした中、文明十四年に仏光寺経豪は、順如を通して本願寺に参入し、興正寺は蓮如の傘下に入った経豪が本願寺に参入したのは山門からの圧力を受けた面もあるが、もっと重要なのは、経豪自身が山門にいう「無碍光流」すなわち蓮如の教えに心酔していたことが理由として挙げられる。

経豪と蓮如との接触は、文明三年大谷本願寺が破却され蓮如が吉崎の地に滞在した時に始まると考えられる。経豪は「然間経豪乍有当山法流私信天蓮如教旨<sup>(三一)</sup>」と、蓮如の教旨を信じていたという。その後、『渋谷歴世略傳』には「于時蓮如、以無碍光如来為本尊、於是呼称無碍光派、経豪與之勦力謀張行、師父近親屢諫之不聽<sup>(三二)</sup>」とあるように、経豪は周りの親しい人からとめられるほど、蓮如の教えに傾倒していたことが分かる。経豪が仏光寺から追放された理由は、「経豪猶与蓮如党相往来於処々相勸故遂为一味露頭畢<sup>(三三)</sup>」との記述からも読み取れる。

了源が山科に建てた興正寺の最初の敷地は安祥寺村にあったが<sup>(三四)</sup>、経豪が本願寺に参入する時、「経豪初居常楽臺、後結草菴於山科、復旧名号興正寺、住処字以古名称竹中莊<sup>(三五)</sup>」と、山科本願寺寺内町の中に新たに興正寺を開いたのである。経豪は了源の時の寺号を用いながら、また参入する前に渋谷の仏光寺在処竹中莊の呼称を山科の住処に命名したのはまた興味深いところである。

『大谷遺跡録』にある「山科興正寺記」には、

寛正六年後土御門院帝ヨリ門跡号ヲ勅許アリ、ソノコロ、寺僧四十八坊アリ、然ルニ、經營上人ノ舎兄、華園院大納言經豪上人（亦号蓮教）祖師聖人ノ名ケ玉フ興正寺ノ寺号一旦隠レ玉フコトヲイタマシク思ヒテ、寺僧四十二坊、国々ノ門徒数万一同二分派シテ興正寺ヲ別立セリト云云<sup>三六</sup>

とあり、概ね『叢林集』巻九の記述と一致している。

經豪が仏光寺派から別立した理由として、了源上人が開いた興正寺の寺号が「一旦隠レ玉フコトヲイタマシク思ヒテ」とあることから、かつて了源が寺を建てたこの山科の地に「興正寺」を再興する願望があったためと推測できる。なお、上記の史料の「寺僧四十二坊、国々ノ門徒数万一同二分派シテ興正寺ヲ別立セリト云云」という記述から、經豪は本願寺に参入したというより、山科本願寺寺内町の地に、仏光寺と別立した興正寺を造り直したとも考えられる。

この点について次の史料からも読み取ることができる。中御門宣胤の日記『宣胤卿記』の延徳元年（一四八九）正月十三日条に、

花恩院「經豪山科」磕一荷、雉二番、昆布五把送之

とある。「花恩院」の院号は經豪が仏光寺住職の時から名乗っていたが、その院号は『宣胤卿記』の延徳

元年（一四八九）正月十三日条だけではなく、文龜四年（永正元年、一五〇四）七月十六日条、永正十六年（二五一九）三月七日、十日条にも見られる<sup>三七〇</sup>。「花恩院」の院号は仏光寺嫡流系統の証として名乗っていたと考えられている<sup>三七〇</sup>。そして、経豪は本願寺に参入し、興正寺を再興するときもこの院号を継承し続け、仏光寺の時から始まった中御門家との関係は興正寺の時も維持し続けられたと言えるという。

経豪が本願寺に参入した当時、仏光寺から持ち出したものとして「高祖御寿像四十歳御自作同恩手皮ノ名号、同真書ノ十字名号、三経往生文類、上宮太子御影、後鳥羽院御直衣聖人頂戴御衰高祖四十歳威勢大神宮参詣時、僧形ヲ隠シ玉フ蓑ナリ念珠、九条袈裟慈鎮和尚高祖ニ給聖人御自影四十二歳肉附御齒等安置セリ其外数品略之<sup>三七九</sup>」などがある。そして、経豪が引率した門徒は数万人規模にもなったということから、経豪は祖師の了源が造った興正寺を振興する考えも持っていたと考えられる。

つづいて、本願寺派に参入した後の経豪と興正寺と関わる史料を見てみると、

同元年十一月廿一日夜より報恩講の次第。廿二日朝の御時、浄恵、福田寺、誓願寺、夕部（頭人）は慶乗。御式は御坊様、御念仏は上様。…廿五日、（御齋）出口対馬、夕部は、吉野衆。御式は上様。佛光寺殿御齋にめしけり<sup>四〇〇</sup>。

とある。この史料は、実如が住持職に就いて二ヶ月後に迎えた報恩講に仏光寺経豪を招いた記録である。延徳元年（一四八九）蓮如が山科本願寺南殿に退隠し、住持職を実如に譲った年である。同年十一月の

二十五日お斎における世話方は出口対馬、非時の世話方は吉野の門徒衆、「報恩講式」の拝読は蓮如聖人とされ、加えて仏光寺の経豪が招かれている（四二）。

『大谷本願寺通紀』（四三）には経豪と共に参入した四十二人の中「六人改信鎮西」「七人再帰仏光寺」とあり、実際に参入した人数は二十九人であることが分かる。また、経豪を追って本願寺に参入した二十九人も、後に「蓮教与二十九人睽隔て」とあり、経豪と距離を置いた。そして、「凡十年許、蓮宗主深痛嘆之、賜坊号或寺号、而諸子乏寺産、散在諸処、以凶活業、是故法義分雜云云」（四三）と参入してから十年を経て、蓮如が坊号と寺号を賜ったというが、経豪の門徒たちは、各地に散らばっていて、「法義分雜」な境地になつていたと考えられる。

また、蓮如以後の時代になつても、本願寺寺内町に関わる記述の中に、興正寺門徒に関する言及が数箇所見られる。すなわち、仏光寺の経豪が諸国の門徒を率いて本願寺に参入したあとも、その門徒らはかならずしも本願寺門徒としてすべて統合されたわけではなく、興正寺門徒としての立場を維持しながら山科本願寺寺内町において活動をしていたと考えられる。

経豪の本願寺参入について、熊野恒陽氏は「同派同体」という表現が適切であると指摘する。さらに蓮如時代において、「興正寺と本願寺の関係は、従属の関係ではない。門下は別であり、関係は対等だった。蓮如時代の本願寺の本末関係はかなりゆるやかな結合関係である。蓮如教団は同盟団で、蓮如は盟主であった。」（四四）という。

本稿では、本願寺と興正寺の関係は、熊野恒陽氏がいう「同盟」関係の主張に従いたい。経豪は教義上蓮如と接近し、仏光寺派内部においても山門からの圧力を受け、現状維持することが困難な境地に陥

る中、本願寺の傘下に入り、山科本願寺と隣接の地に旧号をもちいて寺院を建立したのであると考える。そして、両寺院の關係について、裏付ける史料は見当たらないが、時代を下つて、十八世紀に書かれた『大谷本願寺通紀』にある「今在本山境内、非別派別山也、然以為御門跡家故、准余門而列之」<sup>(四五)</sup>との記録から興正寺は本願寺教団において、独自性を有していたことを読み取ることができると考える。史料によれば、当時、山科本願寺寺内町に再興された興正寺は別派ではなく、本山でもないが、門跡の家柄を用いているため、「余門」として位置付けられるという。注目すべきは「余門」という言葉である。「余門」の意味は「自派以外の門派」<sup>(四六)</sup>の意と考えられる。蓮如時代の興正寺は本願寺教団に統合されていたわけではなく、別の派と同格の形で山科本願寺寺内町に本願寺と併存する自立的な一派と見なされていた可能性がある。

また、本願寺と興正寺は立地上隣接しており、さらに経豪は蓮教と改名し、「即常樂寺蓮覚ノ智君トナシテ、親屬ノマシハリ他ニ異也」<sup>(四七)</sup>という本願寺との親屬關係があるなどの前提条件を有したことから、蓮如は興正寺の独自性を許し、「ゆるやかな同盟關係」を作り上げたのであると理解すべきだろう。

#### 四、同朋同行思想と参入寺院

蓮如時期本願寺教団の同盟關係を支えたのは「同朋同行」の思想である。この考えは早くは中国の曇鸞にみられ、その後親鸞を経て真宗教団において受けつがれていたものと考えられる。

親鸞の念仏者に対してあるべき態度について『歎異抄』の内容を確認する。第六章には、

専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの仔細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらう。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念仏をまうさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに弥陀の御もよほしにあづかて念仏まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あれば、はなるゝことのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わかものがほにとりかへさんとまうすにや、かへすゝもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと、云々。

とある。専修念仏の輩が、自分の弟子、人の弟子という争論がございすことは、常軌に外れる異議である。親鸞は弟子一人ももっていません。その理由は、もし自分の計らいで、人に念仏させるのならば、弟子にてもございすでしょう。ですが、ひとえに阿弥陀仏の計らいによつて念仏を申します人を、我が弟子と申すことは、極めて軽率なことである。つくべき縁があるから従い、離れるべき縁あるから、離れることがあるということを、師に背いて、他人について念仏するならば、往生することができないということは、いふべきではないのである。如来からいただいた信心を、我がものように取り替えようと申すのであろうか、くれぐれもあつてはならないことである。自然の理に適うならば、仏恩である



ことを知り、また、師の御恩であることもわかるはずであるという。

親鸞は、念仏者の信心は阿弥陀仏によるものであり、そして、念仏者の関係は縦の関係ではなく、縁によって結ばれたもので、たとえ師に背いて、他の人について念仏したとしても、往生できないなどというべきではないという。

蓮如は念仏者間の関係について、親鸞の考えを継承した立場をとる。文明三年七月十五日の御文で蓮如はつぎのように述べている。

或人イハク、当流ノコ、ロハ、門徒ヲハカナラス我弟子トコ、ロハオクヘク候ヤラン。如来聖人ノ御弟子トマフスヘク候フヤラン、ソノ分別ヲ存知セス候フ。又在々所々ニ小門徒ヲモチテ候ヲモ、此間ハ手ツキノ坊主ニハアヒカクシオキ候ヤウニ心中ヲモチテ候。コレモシカヘルヘクモナキ由人ノマフサレ候間、同クコレモ不審千万ニ候。御ネンコロニ承度候。答テイハク、此不審尤肝要トコソ存候へ、カタノコトク耳ニト、メオキ候分、マフシノフヘクキコシメサレ候へ。故聖人ノ仰ニハ、親鸞ハ弟子一人モモタストコソ仰ラレ候ヒツレ。ソノユヘハ、如来ノ教法ヲ十方衆生ニトキキカシムルトキハ、タ、如来ノ御代官ヲマフシツルハカリナリ。サラニ親鸞メツラシキ法ヲモヒロメス、如来ノ教法ヲ我モ信シ、人ニモオシヘキカシムルハカリナリ。ソノ外ハ、ナニヲオシヘテ弟子トイハンソト仰ラレツルナリ。サレハトモ同行ナルヘキモノナリ。コレニヨリテ、聖人ハ御同朋御同行トコソカシツキテ、仰ラレケリ(四八)。

ある人がいうことには、当流では、門徒は必ず自分の弟子と心得るべきか、阿弥陀如来親鸞聖人の御弟子というべきであるのか、その分別を存じません、また、在々所々に僅かな門徒を持っているが、この間、自分の師である坊主に隠しておくといった気持ちでいました。こうしたこともよくないことであると、人が申したので、これも前の疑問と同じ不審の極みである、と念仏者間の関係について蓮如に訪ねた。そこで、蓮如は親鸞の言葉を引き、親鸞は弟子を一人も持っていないとおっしゃっている、その理由として、私たちが如来の法を十方の衆生に聞かせる時は、ただ阿弥陀如来の御代官として申し上げているだけなのである。さらに、親鸞は全く珍しい法を広めず、阿弥陀如来の法を自分も信じ、他人にも教え聞かせるだけである。そのほか、何を教えて我が弟子と言えるだろうか、とおっしゃっていた。そうであるから、我ら念仏者の関係は同行であるべきである。親鸞聖人は念仏者を皆御同朋・御同行と傳いて仰せになっていたのであると答えたのである。

蓮如は親鸞の主張に基づき、通常は師と呼ばれるような人も、阿弥陀仏の教法を「御代官」として阿弥陀仏の代わりに広める立場にいただけで、そこに師弟関係はないと考えていた。つまり念仏者には師と弟子という上下関係はなく、みな等しく御同朋・御同行の関係と考えられていたのである。

蓮如の念仏者に対する考え方は『第八祖御物語空善聞書』にも読み取れる。

仰二、オレハ門徒ニモタレタリト、ヒトヘニ門徒ニヤシナハル、ナリ、聖人ノ仰二ハ、弟子一人モモタスト、タ、トモノ同行ナリ、ト仰候キトナリ(四九)。

と記している。蓮如は親鸞の「聖人ノ仰ニハ、弟子一人モモタスト」の言葉を引用して、門徒間の「同行」関係を示している。また、

仰ニ、身ヲステ、平座ニテミナト同座スルハ、聖人ノ仰ニ四海ノ信心ノヒトハミナ兄弟ト仰ラレタレハ、ワレモソノ御コトハノコトクナリ、又同座ヲモシテアラハ不審ナル事ヲモトヘカシ、信ヲヨクトレカシトノネカヒナリト仰候キ<sup>(五〇)</sup>。

と身分の違いを捨て去り、平座にして、みなと同席することは、親鸞聖人がこの世で信心を持つ人は皆兄弟であるとおっしゃっていた通りに行っているのであると蓮如が親鸞の主張を實踐している姿が見える。また、蓮如臨終の際の言葉にも、

十八日ノ仰ニ、カマヘテ我ナキアトニ、御兄弟タチ中ヨカレ。タタシ一念ノ信心一味ナラハ、中モヨクテ聖人ノ御流義モタツヘシ、トクレ／＼御掟アリケリ<sup>(五一)</sup>。

と自分が死んだ後に、ご兄弟たち仲良くするように。ただ阿弥陀仏を信じる心を持つ人々ならば、仲良く親鸞聖人の教えを保つだろう、と教団内の人間関係について念を入れて戒めていた<sup>(五一)</sup>。

このように、蓮如は親鸞の同朋同行思想を受け継ぎ、念仏者間の関係性を論じていたのである。

蓮如は山科本願寺と西宗寺、興正寺との関係を考慮する時、同朋思想を元に、本願寺教団内部の上下関係を明確にするよりも、諸派門徒の間の摩擦を意識し、教団内部の融和共存が重要であると考えてい

たと推測される。これゆえ、西宗寺と海老名氏は蓮如から下附された絵像を受けつつも、興正寺の門徒としても存在することが許されたのである。興正寺も本願寺の傘下に入っているように見えるが、実際は「余門」としてある程度の独自性を有していたと考えられるのである。

本稿では、念仏者間の関係について、蓮如は親鸞の同朋思想を継承していた面が見えると主張した。そして、蓮如の意図は教団内部を融和し、教団を拡大していくところにあると考えられる。一方、蓮如時期において、大坊主と坊主との分化する傾向が見られ、蓮如より以後も、本願寺教団における門徒間の階級規律が漸次構成されているとの指摘が見られる<sup>(五三)</sup>。このような動きは蓮如の考えと矛盾するところがあるが、一つ考えられるのは、それは本願寺教団の発展過程に属する段階の差によるものである。のちの本願寺教団は、階級規律を定め、内部組織を細分化するなどの現象は教団をより強固するため、現実的な需要に対応した結果であると考ええる。

## 五、おわりに

以上、山科本願寺寺内町にある本願寺と興正寺、西宗寺との関係そして、参入した寺院に対する蓮如の態度について考察してきた。

西宗寺海老名五郎左衛門の事例から、蓮如時代の浄土真宗の門徒は各派閥の間に比較的容易に変えることができる状況にあり、そして、本願寺に参入した興正寺は保護を受けているようにみえるが、実際

には独自の門徒を持ちつつ、本願寺教団の中「余門」としての地位を認められていたと推測する。そのような状況は、思想面において親鸞から受け継いだ同朋同行思想によって成り立っていたのであると考えられる。

蓮如は新たに参入してきた寺院との軋轢を避け、緩やかに併存する態度を取っていた。その一方で、本願寺教団が拡大する中、寺格や、それにもとづく上下関係など、実質上の身分の差が生まれていたこともまた事実である。一見、蓮如の同朋思想と教団発展の実態との間で、矛盾があるように思えるが、それは現実状況に対応する中で生じたものと考えられる。

蓮如は教団を拡大する中で、教団内部における融和併存の関係を求める旨を含め、同朋同行を主張し続けてきた。本願寺教団の急拡大により、教団内外諸勢力の間に新たな軋轢が生れたことは十分に考えられる。

今回は山科本願寺寺内町にある西宗寺と仏光寺を切口に、蓮如期本願寺教団の内部状況と互いの関係性を考察し、同朋同行思想に基づき蓮如の考えについて検討を行った。今後は、山科本願寺寺内町に他の寺院について<sup>(五四)</sup>考察し、蓮如時期教団の実態と蓮如が寺内町を立てる思想的根拠について検討したい。

(こ)う けいきん・文学研究科日本文化専攻博士課程一年

〔註〕

(一) 「寺内町」の読み方は辞書によって「じないまち」または「じないちょう」と呼ばれることがある。大澤研一氏が「寺内町」の読み方について、「じないまち」または「じないちょう」は、個人の判断により分けられており、一定ではないという現状があると言ふ。

「寺内町」を史料用語としての「寺内町」の用例は二例確認される。一つ目は貞享五年（一六八八）に書かれた『御寺内町数の覚』という本の題目に見られる。二例目は「本願寺作法之次第」には「寺内町の掟を番屋にをさ（せ）られ候し、定まて今も所持せられたる人あるへク候歟、その内吹物音曲停止の日、御仏事七日之間、毎月廿八日、廿五日、盆、彼岸等停止の事也。魚売買なき日、御遊山などの日、御迎人之儀等、或鐘数など被注候し」という部分である。

(二) 西川幸治「寺内町に形成——吉崎と山科——」〔『仏教芸術』六六号、一九六七年、一一、二一〇〕

(三) 大澤研一・仁木宏編集『寺内町の研究 戦国社会と寺内町』第一巻、一九九八年

(四) 仁木宏「空間・公・共同体中世都市から近世都市へ」青木書店 一九九七年

(五) 鍛代敏雄「摂津中島本願寺寺内考」〔『地方史研究』二〇六号、一九八七、四〕

(六) 千葉乗隆論文「真宗教団における改宗寺院の形態——甲斐国三光寺——」〔『中世仏教と真宗』所収、北西弘先生還暦記念会編 吉川弘文館 一九八五、一一〕

(七) 『蓮如裏書集』〔『真宗史料集成』第二巻、堅田修 二〇〇七年、同朋舎、三九八頁〕

(八) 中世では一般的に野村と記載されているが、近世に入つて明確に西野村・東の村と分かれるという。原田正俊「戦国期の山科郷民と山科本願寺・朝廷」注八〇参照。〔『寺内町の研究』巻二、寺内町の系譜、法蔵館、二〇〇〇年〕

(九) 百瀬正恒「山科本願寺の占地と構造」〔『関西近世考古学研究会 VIII 特集 寺内町の成立と展開』関西近世考古学研究会、二〇〇〇年〕

(一〇) 文明十二年（一四八〇）に、海老名五郎左衛門尉が蓮如に寄進した寺地の面積が「四五丁余り」とあり〔『蓮如尊師行状記』真宗史料集成』第二巻、八九五頁）、そして、「明応八年三月中旬、阿芸法眼御侘言加申。テ山科

ノ八町ノ町に上洛アリシカ共申次人モナシ。」と、明応八年（一四九九）に寺内の面積は八町と拡大されていることがわかる。（『蓮如上人御一期記』『真宗史料集成』第二巻、五三五頁。）また、現在考古調査による推定された山科本願寺寺内町の土地面積はさらに拡大されていることがわかる。（井上尚輔「中世城郭伽藍・山科本願寺、——その歴史考古学的考察——」『寺内町の研究』巻二、寺内町の系譜、法蔵館二〇〇〇、収録）つまり、山科本願寺寺内町の空間面積は本願寺の発展段階につれて、漸次拡大していったといえる。蓮如の時代では、山科本願寺寺内町の面積はどのぐらいあるのかは明白していないが、本稿では西宗寺の位置を考える際に考古発掘により判明された山科本願寺寺内町の範囲を根拠に西宗寺と山科本願寺寺内町との位置関係を把握する。

- (一一) 原田正俊「戦国期の山科郷民と山科本願寺・朝廷」〔寺内町の研究〕巻二、寺内町の系譜、法蔵館、二〇〇〇年
- (一二) 『大谷本願寺通紀』〔真宗史料集成〕第八巻、三六一頁
- (一三) 『蓮如尊師行状記』〔真宗史料集成〕第二巻、八九五頁
- (一四) 中島慈応『真宗法脈史』法文館、一九二一年、九三頁。
- (一五) 『反古裏書』〔真宗史料集成〕第二巻、七五四頁）等の史料から確認できる。
- (一六) 『本願寺史』に「山科本願寺の寺地を提供したと伝えられる西宗寺も、法物類の裏書には興正寺門徒と記されている（文亀元年（一五〇二）七月二十八日付絵像本尊裏書・天文元年（一五三二）五月十五日付実如宗主御影裏書）」のと記述がある。（本願寺史料研究所『増補充改訂 本願寺史』第一巻、本願寺出版社、二〇一〇年、四六一頁）
- (一七) 『真宗史料集』第二巻、解説参照。
- (一八) 『蓮如裏書集』〔真宗史料集〕第一巻、三九八頁）
- (一九) 『紫雲殿由縁記』（僧明專著、寛永十五年成立、延亨四年増修）（真宗全書第七〇巻、一一九頁）
- (二〇) 『大谷本願寺通紀』歴代宗主伝第二（『真宗史料集』第八巻、三六二頁）
- (二一) 『大谷本願寺通紀』旁門略伝標目（『真宗史料集』第八巻、四三六頁）
- (二二) 『仏光寺派古文章』〔真宗史料集〕第四巻、六〇九頁）
- (二三) 『真宗史料集成』第七巻の解題を参照。

(二四) 『興正寺由来』(院家系図略記の内)(元禄年間著)、『真宗史料集成』第七卷、七六五頁)

(二五) 『本願寺末脇門跡興正寺開基以来諸留書』に「興正寺開基、了源と申候、正中元年山科ニテ一寺建立有之、本山第三世覚如ヨリ興正寺と寺号ヲ与へ、開山ヨリ相伝之宗旨ヲ学申候処、法義之子細ニ付、覚如ヨリ門弟ヲ放サレ候ニ付、嘉暦年中寺号ヲ仏光寺ト改号、別派ニ相成居申候、」(以下略)がみえる。『真宗史料集成』第四卷、解説引用)。

(二六) この関係を示す史料として「其後連々入来、依所望、数十帖聖教或新草或書写」がある。『真宗史料集成』(第一卷)。

(二七) 『真宗史料集成』第四卷の解説を参照。

(二八) 『真宗史料集成』第四卷の解説を参照。

(二九) 覚如『改邪鈔』の冒頭に次のように書かれている。曾祖師黒谷の聖人の御制作『選択集』にのべらるゝ、がごとく、大小乗の顕密の諸宗におのおの師資相承の血脈あるがごとく、いままた浄土の正宗においておなじく師資相承の血脈あるべしと云云。しかれば血脈を立つる肝要は、往生浄土の他力の心行を獲得する時節を治定せしめて、かつは師資の礼をしらしめ、かつは仏恩を報尽せんがためなり。かの心行を獲得せんこと、念仏往生の願常住の「信心歡喜乃至一念」等の文をもて依憑とす。このほかいまだきかず。曾祖師源空・祖師親鸞両師尾相伝の当教において、名帳と号してその人数を記すをもて往生浄土の指南とし、仏法伝持の支証とすといふことは、これおそらくは祖師一流の魔障たるをや。ゆめゆめかの邪義をもて法流の正義とすべからざるものなり。(後略)史料引用は笠原一男『蓮如』(吉川弘文館、一九六三年)五〇頁。

(三〇) 草野頭之『真宗教団の地域と歴史』清文堂、二〇一〇年、六頁。

(三一) 『仏光寺法脈相承略系譜』(寛政四年、著者不明)、『真宗史料集成』第七卷、七六〇頁)

(三二) 日下無倫『真宗史の研究』臨川書店、一九七五、史料参照。

(三三) 『仏光寺法脈相承略系譜』(『真宗史料集成』第七卷、七六〇頁)

(三四) 「山科最初ノ敷地ヲ安祥寺村替ヘ寄進トシテ汁谷或云渋谷中ノ庄ニ移住セシム」という。『叢林集』(恵空著、元禄十一年五月)、『真宗史料集』第八卷、三二七頁)

(三五) 『大谷本願寺通記』(玄智著、十八世紀)(卷六)(『真宗史料集』第八卷、四三六頁)



- (三六) 『大谷遺跡録』(先啓著、明和八年刊、安永八年重校)、『真宗史料集成』第八卷、七四四頁)
- (三七) 『宣胤卿記』(中御門宣胤の日記、増補史料大成)、臨川書店(山科本願寺・寺内町研究会)『戦国の寺・城・まち』法藏館、一九九八年)二七三頁史料参照。
- (三八) 熊野恒陽・藤谷信道・福嶋崇雄「佛光寺異端説の真相」白馬社、一九九九年
- (三九) 『大谷遺跡録』(『真宗史料集成』第八卷、七四四頁)
- (四〇) 『第八祖御物語空善聞書』(『真宗史料集成』第二卷、四二〇頁)
- (四一) 史料の意識は大谷暢順「蓮如上人・空善聞書」(『講談社学術文庫』二〇一四年)に参照。
- (四二) 『大谷本願寺通紀』(卷六)(『真宗史料集成』第八卷、四三六頁)
- (四三) 『大谷本願寺通紀』(卷六)(『真宗史料集成』第八卷、四三七頁)
- (四四) 熊野恒陽・藤谷信道・福嶋崇雄「佛光寺異端説の真相」白馬社、一九九九年
- (四五) 『大谷本願寺通紀』(卷六)(『真宗史料集成』第八卷、四三六頁)
- (四六) 『新版禅学大辞典』駒沢大学禅学大辞典編纂所編 大修館書店、一九八五年
- (四七) 『反古裏書』(顕誓著、永禄十一年)(『真宗史料集成』第二卷、七五四頁)
- (四八) 『諸文集』(九)(『真宗史料集成』第二卷、一四三頁)
- (四九) 『第八祖御物語空善聞書』(一〇一)(『真宗史料集成』第二卷、四三三頁)
- (五〇) 『第八祖御物語空善聞書』(一〇〇)(『真宗史料集成』第二卷、四三二頁)
- (五一) 『第八祖御物語空善聞書』(二四六)(『真宗史料集成』第二卷、四三六頁)
- (五二) 『歎異抄』に親鸞の「弟子一人も持たず」の話について、金子大栄は「念仏者達の教団が結ばれても、そこに師弟の約束はあるべきではない。縁に順って他の集団に入るようになっても、同朋であることに変わりはないのである」との解釈が見える。金子大栄『歎異抄』(岩波文庫、一九八三、五一頁)
- (五三) 千葉隆盛『本願寺史料集成 西光寺古記』同朋舎、一九八八年、解説参照。
- (五四) 「十五年正月以来、山科多屋六寺、及び七坊成」と、文明十五年(一四八三)の山科には多屋六寺と七坊が置かれていたことが知られる。具体的には「未考其名、或云、常楽寺、興正寺、金法寺、本福寺、仏照寺、西方寺、

性応寺、端坊、西坊、東坊、本光坊、空円、了性、是（『大谷本願寺通紀』『真宗史料集』第八卷、三六二頁）と、蓮如時期の山科本願寺寺内町に存在する寺院が記録されている。その中、興正寺を含む「多屋（六寺）」と「七坊」について、ほとんど明らかにされておらず、状況である、さらに、西宗寺仏光寺のほか山科地域にある三ノ宮神宮及び醍醐寺三法院も視野に入れて、山科本願寺寺内町における宗教面の諸問題を考える予定である。

